県史跡「一宮城跡」の発掘調査について

1　一宮城跡とは

一宮城跡は、吉野川の支流鮎喰川の流れが山間部から平野部へと変わる付近の南岸山塊に位置しています。眼下には鮎喰川が流れ、背後に東竜王山系の急峻な峰々を控えた天然の要害です。また、東方向に紀伊水道、北東方向に鳴門海峡が望見でき、徳島平野の東部をほぼ一望できる立地にあります。

一宮城は、阿波守護小笠原長房の子長久の四男長宗が、南北朝時代初期、暦応元年（1338）に築いたと伝えられています。その後、小笠原長宗の子孫である一宮氏が在城したとされ、戦国時代には一宮氏の山城として整備され、細川氏、三好氏、長宗我部氏の攻防の舞台となります。

天正10年(1582)に阿波を制圧した長宗我部氏は一宮城に兵を配し、豊臣氏の四国平定に対する防衛の拠点としますが、豊臣秀吉に降伏した後は、阿波に入国した蜂須賀家政の最初の居城となります。この際に阿波支配の拠点として改修を始めるものの、約一年で徳島に本拠を移すこととなります。その後、蜂須賀氏が領国支配の安定を図るため領内の要衝地に配置した９つの支城（阿波九城）の一つとして城の機能を維持しますが、元和の一国一城令（1615）を受けて廃城になったとされています。なお、現在残る本丸石垣等の城跡は、蜂須賀氏が居城としてから廃城となるまでに整備されたものと考えられています。

2　一宮城跡国史跡推進事業について

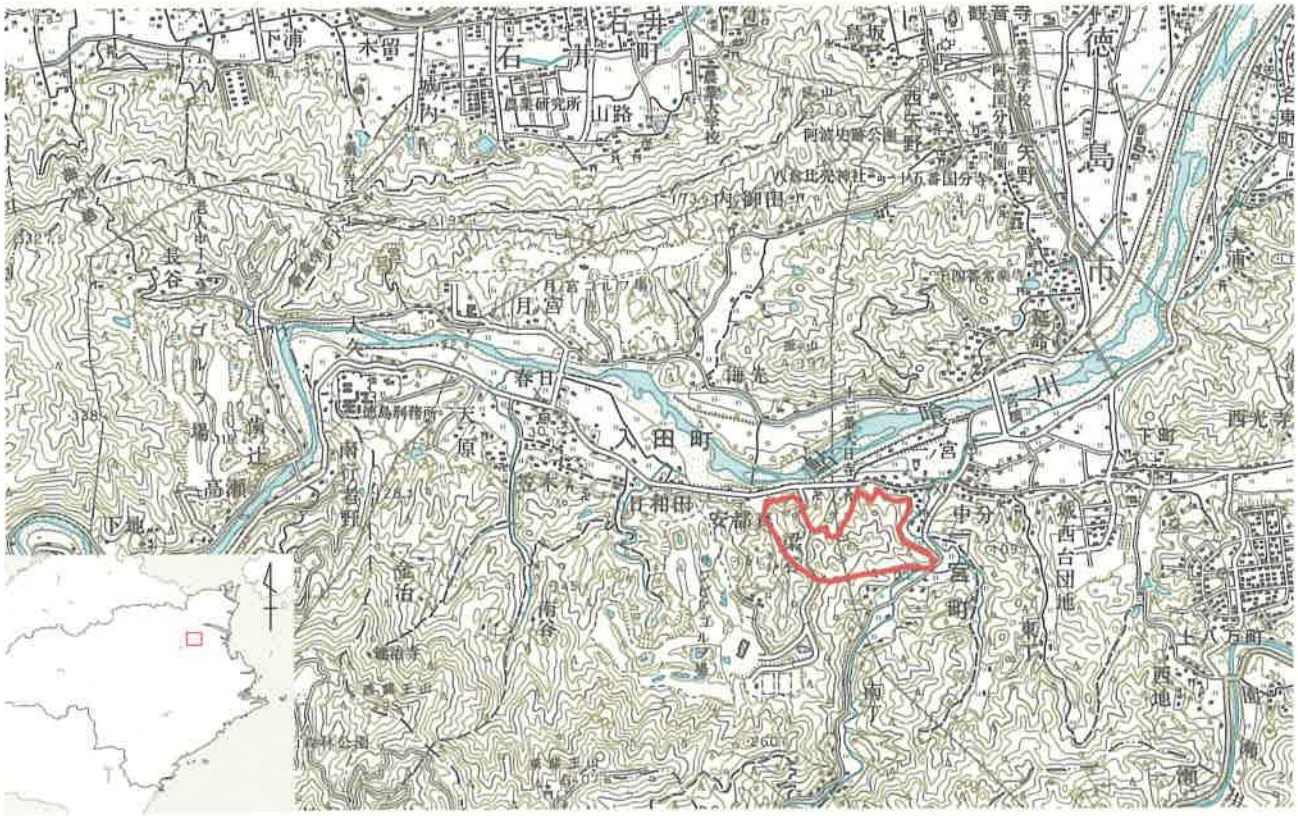
現在県の指定史跡である「一宮城跡」は、阿波の中近世史上欠かすことのできない重要な遺跡であり、徳島県中世城館跡総合調査においても、その規模と良好な遺構の保存状態が高く評価されています。麓には重要文化財建造物一宮神社本殿、日本遺産の四国遍路を構成する１３番霊場大日寺があり、一宮城跡はこれらとともに地域を象徴する歴史遺産です。また市内で最も古い保存会（昭和２９年発足）があり、清掃活動には毎回多くの住民が参加するなど、住民との距離が非常に近い史跡です。今後、一宮城跡を地域づくりの核として整備し、活用するために、徳島市では、平成２９年度より一宮城跡国史跡推進事業を実施しています。

事業目的：発掘調査や文献資料調査といった総合調査を実施することで、一宮城跡の価値をさらに高める。
調査内容：発掘調査、測量調査、石垣調査、文献調査、地籍図調査、石造物・寺院調査など
事業期間：平成２９年度～令和３年度（５カ年）

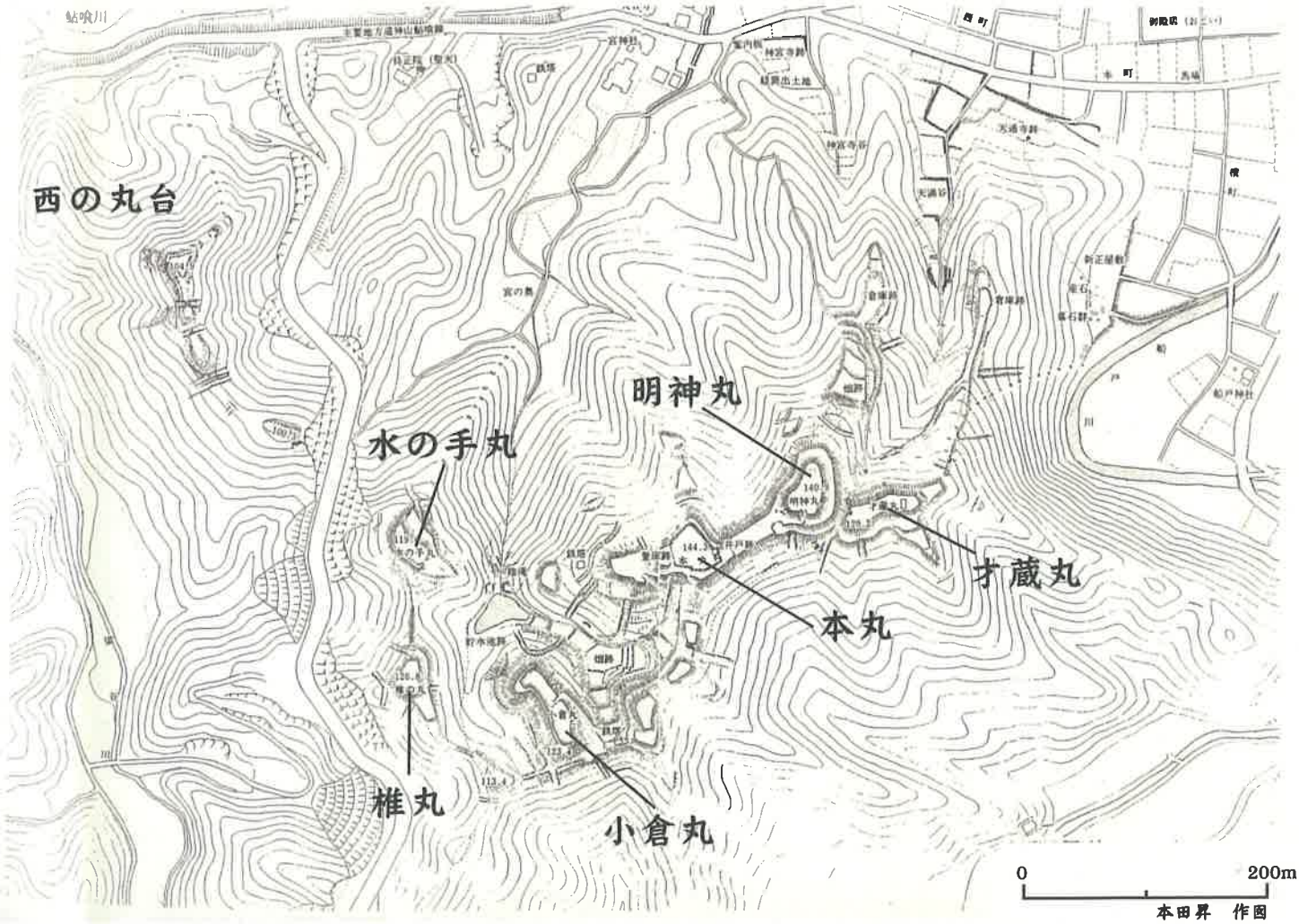
３　令和２年度の発掘調査成果について

前年度までの成果を踏まえ、蜂須賀氏入城以前の状況を確認することを目的に発掘調査を実施し、16 世紀後半のものと考えられる輸入磁器（漳州窯か？）が岩盤直上の柱穴の中から出土しました。一方で曲輪の南端では、腐葉土直下から石敷き遺構が確認されており、小倉丸では数回に分けて改修されていたことがわかります。また土塁については、筋状に岩盤を残しつつその上に土を盛って構築する手法がとられ、小倉丸西側斜面に広がる横堀や土塁と併せて非常に大規模な作事（土木工事）が行われていたことがみてとれます。

～Memo～

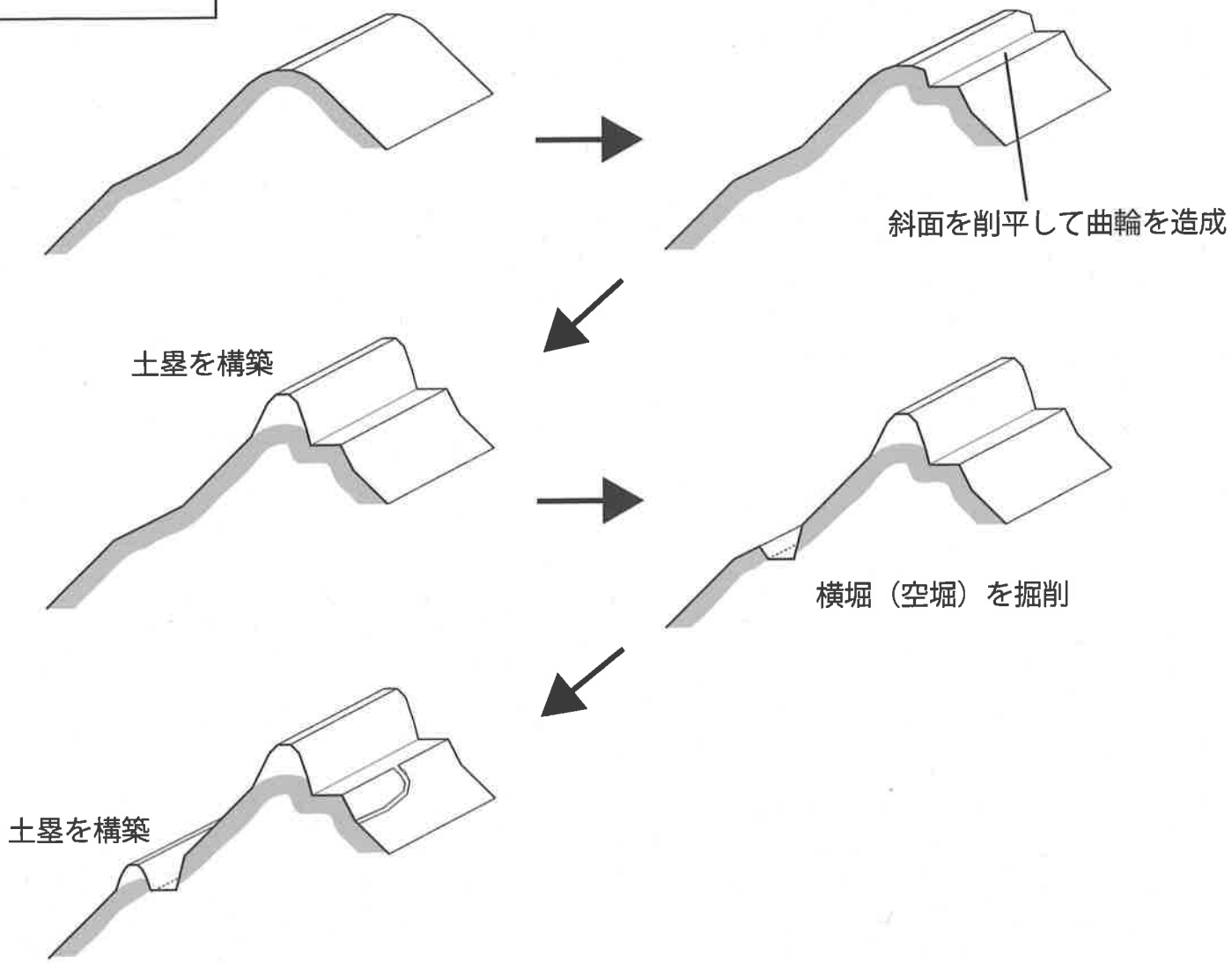


一宮城跡位置図（1/50,000）

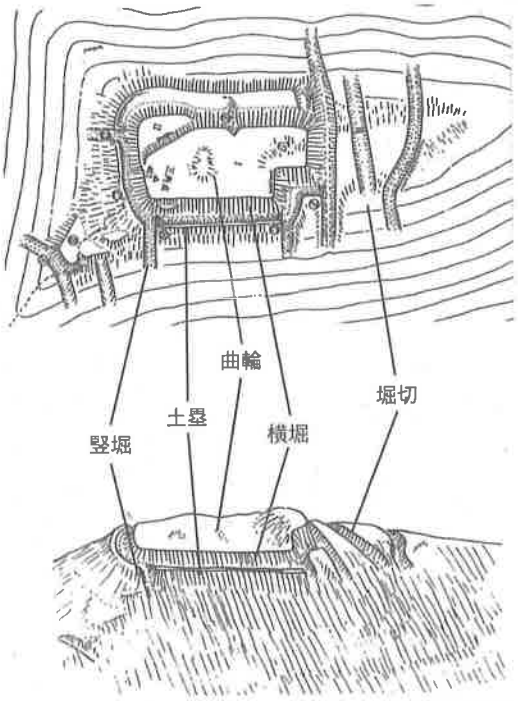


一宮城跡縄張図（一部加筆）

小倉丸構築模式図



用語集



作図　本田昇

曲輪（郭）（くるわ）　・・・城兵が駐屯するなど、城の防御のために造成された削平地。

堀　切（ほりきり）　・・・主として尾根筋の防御のため、これを断ち切るように掘られた堀。

横　堀（よこぼり）　・・・曲輪を囲むように斜面に対して横方向に掘られた堀。通常、土塁とセットになる。

竪　堀（たてぼり）　・・・斜面に対して垂直に掘られた堀。斜面の横方向への移動を防ぐ。

土　塁（どるい）　・・・主として曲輪の防御のために、曲輪周縁などに巡らされた土手状の盛土。

虎　口（こぐち）　・・・曲輪の出入り口